

野球選手における投・送球イップスの身体的症状の特徴

○松崎慎平¹・川田裕次郎^{1,2}・野栗立成¹・山口慎史^{1,3}・広沢正孝^{1,2}・柴田展人^{1,2,3}

(¹順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科・²順天堂大学スポーツ健康科学部・³順天堂大学スポーツ健康医科学研究所)

キーワード：投・送球イップス、身体的症状、野球

目的

イップスとは「精緻で、制御され、技術の求められる運動行動の実行過程において生じる不随意運動から成る長期間の運動障害」である (McDaniel et al., 1989)。イップスは、ゴルフ、クリケット、射撃など多様なスポーツで報告され、パフォーマンス低下の要因となっている (Philip et al., 2016)。

野球のイップス症状の1つは、一定の距離 (20m 前後) で投球コントロールが極端に乱れることである (中込, 1987)。野球のイップスは投球場面と送球場面で生じることから「投・送球イップス」と呼ばれている (賀川・深江, 2013)。

これまでの先行研究を概観すると、主にインタビュー調査を用いた質的研究により、「手首がロックされた」「リリース時の感覚がなくなった」などの投・送球イップスの症状が明らかになっている (Aida et al., 2016)。

しかしながら、これらの投・送球イップスの症状は、症状そのものが独立しているか、あるいは相互に関連したものかは明らかにされていない。例えば、「手首がロックされた」という症状と「リリース時の感覚がなくなった」という症状が独立して生じるのか相互に関連しているのかが明確ではない。

スポーツのコーチング場面では、野球に関わらず選手の異変を身体動作から判断することが多い。そのため、投・送球イップスの身体的症状の特徴を明らかにすることは、これまで明らかにされていなかった投・送球イップスの特徴を理解することに繋がり、チームメイトや指導者からの早期発見を促すことができる。これらによって、その後の選手へのサポートや環境の改善等の投・送球イップスへの対策につなげることができ、選手の健全なパフォーマンスを支える手立てになることが期待できる。

そこで本研究の目的は、投・送球イップスの身体的症状同士の関連を明らかにすることをした。

方法

調査時期・対象者 調査時期は、2017年12月であった。対象者は、2年以内に大学野球チームに所属し競技歴10年以上であり、既に引退していて、イップス経験のある選手14名 (平均年齢22.5歳、±1.5) であった。

調査内容 1) 個人属性 (年齢、競技歴、ポジションなど) 2) 質的研究で明らかにされたイップスの身体的症状を問う質問20項目に「非常に当てはまる (5点)」から「まったく当てはまらない (1点)」の5件法で回答を求めた。

調査方法 質問紙調査を実施した。

倫理的配慮 対象者には文章と口頭で、自由意思に基づく調査であることを説明した。質問紙内に「イップス」という単

語は使用しないこととした。

分析方法 量的研究によって明らかにされた投・送球イップスの7つの症状 (Matsuzaki et al., 2018) 同士の関連を Spearman の順位相関を用いて検討した。

結果

分析の結果、「力を入れるタイミングがわからなくなる」と「投球時に腕が振れなくなる」の間に有意な正の相関 ($r = .66, p < .01$) が確認された。一方で、その他の身体的症状 (「手首が固まる」「投げる動作を忘れる」「スナップスローができなくなった」「ボールが抜ける」「ボールが引っかかる」) 同士の関連は示されなかった。

考察

本研究では、野球における投・送球イップスの身体的症状同士の関連を検討した。その結果、「力を入れるタイミングがわからなくなる」と「投球時に腕が振れなくなる」に正の相関が確認された。一方で、その他の身体的症状の間には相関がみられなかった。

これらのことから、野球選手のイップスの症状は投球動作の中で力を入れるタイミングがわからなくなると、腕が振れなくなってしまうという症状同士の関連が示された。一方で、その他の症状同士には相関がみられなかったことから、その他の身体的症状は独立していると言える。「手首が固まる」「投げる動作を忘れる」「スナップスローができなくなった」「ボールが抜ける」「ボールが引っかかる」といった症状は独立して生じる可能性がある。

これらのことから、野球選手の投・送球イップスの身体的症状は多様であるといえる。つまり、1つの症状が出現すると他の症状も同様に出現するのではなく、様々な出現様式が存在し、それは症状によって異なる可能性がある。

野球選手の指導場面では、多様な投・送球イップスの症状に指導者やチームメイトがいち早く気づき、選手のサポートをしていくことが必要になる。本研究の結果を踏まえると、イップスの症状の把握には、複数の症状が同時に出現するという視点よりも、特徴的な症状が1つでも存在した場合にはイップスの発症を疑う必要があるのかもしれない。この点についてはさらに詳細な検討が必要になる。

利益相反開示；発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業・団体はありません。

(Shinpei Matsuzaki, Yujiro Kawata, Ryusei Noguri, Shinji Yamaguchi, Nobuto Shibata, Masataka Hirose)